

トラークル研究

第十一号

トラークル没後 100 年

及び

トラークル協会設立 20 周年記念特集号

2014 年 10 月

トラークル協会

〒270-0122 千葉県流山市大畔 237-3 三枝紘一方

Tel 04-7150-5782 Eメール saegusakouichi@yahoo.co.jp

目次

1. 序言	
2. 論文	
1. 伊藤 卓立：トラークルの詩「途上にて」(Unterwegs)の最終行 „Laß, wenn “ について -翻訳・誤解・誤訳-	1
2. 三枝 紘一：トラークルの Poetik 序説 -その稿体における語の変更から見たメチエ	26
3. 高橋 喜郎：トラークルの詩における silbern の用法について	45
4. 保坂 直之：連作構造から見たトラークルの『カスパー・ハウザーの歌』	54
3. 随想	
(1) 石橋 道大：「トラークルのゆかりの地を巡る旅」	77
(2) 伊藤 卓立：「トラークル協会のこと」	78
(3) 植和田光晴：「今後とも心すべき問題点」	79
(4) 三枝 紘一：「これからの研究の方向」	79
(5) 高橋 喜郎：「トラークルの詩に出会って」	80
(6) 保坂 直之：「オーストリアのトラークル」	82
4. 会の沿革	83
5. 活動報告	89
6. お知らせ	90
7. 編集後記	90
8. 会員名簿	91
9. 協会会則	92

序 言

三枝 紘一

トラークル没後 100 年とトラークル協会創設 20 年とが重なった今年、「トラークル研究」第 11 号を記念特集号として編んだわけでありますが、これに際して挨拶を申し上げます。

生誕 100 年は、もちろん一般に祝福すべき、いわば日のあたる記念の年と言えますが、没後 100 年は、それ自体驕りを帯びたそれと言えるのではないのでしょうか。したがってその記念の催しも地味なものとなります。しかしトラークルの生地ザルツブルクでは、トラークル研究施設 - 記念館を中心に、ここ一年にわたり様々な行事を催されています。

実質的には、生誕 100 年より没後 100 年の方が、意義があるように思えます。前者は、文学活動に視点をおけば、それが 15 歳に始まる場合、文学活動開始より 85 年となり、区切れのよい年ではありません。これに対して没後 100 年は一その没年の何年か前に創作活動を止めている詩人も存在しますが一文学活動が終わって 100 年ということになります。特に最高傑作「グローデク」の創作直後に亡くなっているトラークルの場合、没後 100 年は、イコール文学活動終了後 100 年となり、この意味でより意義があると言えます。

この認識に立って見て、この 100 年という歳月を閲し、トラークル文学の受容と研究がどのように進展してきたのか、この年月の隔たりがトラークル文学をドイツ文学ひいては世界文学において、いかなる位置を占めるに至ったかが改めて問われる機会となることを念じます。例えば Andreas Okopenko は「私はトラークルはドイツ語文学の最大の詩人の一人と思う」言っていますが、その詩の表現のどの点に、それが言えるのか、更にモデルニートの詩調をいかに咀嚼し、そしてこれをいかにその倫理性と調和させようとしたのか、等を論ずる時期に来たと没後 100 年に際して考える次第です。

トラークル協会は、創設されて 20 年となるわけでありますが、創設当時はどれ位続くであろうかは全く念頭にはなかったのでありますが、ここにきて、もう 20 年、という感慨があります。むしろミニ研究会でありながら、よくここまで続けてきたものであると、今になって初めてこの歳月を振り返る次第です。たしかに曲がりなりにも会誌・研究誌を毎年 1 冊ではありますが欠かさず発行し、年 2 回の研究発表会も殆ど開催されてきました。その内容はともかく研究会としての最低限度の活動を維持してきたわけでありますが、これはもちろん会員各位のご協力の賜物であります。しかしこの活動がどれほど日本におけるトラークル文学の理解、普及に寄与してきたかという点を考えると心もとない。会員数も低減化の傾向にあり、新しく会に加入される方もほとんどなく、またアクティブな会員も極めて少なく会の存続も危うい現状であります。今後創設 30 年に向けて更なる努力を続けねばならないと、この記念の年に思いを新たにする次第です。そのために遅きに失した感否めませんが、来年ホームページを開設し、この会を更に広く公開することにします。

随 想

詩人ゆかりの地を巡る旅

石橋 道大

詩人ゆかりの地を訪ねる旅を、若い頃は馬鹿にしていた。風土と密接にかかわる詩人は別にして、単に詩人の記念碑や滞在地を見物しても、研究の役には立たないと考えていたからだ。若い頃の私は、優れた論文を書くことだけを、ひたすら目指していた。せっかく留学の機会を与えられた時でさえ、ヘルダーリンを研究していたのに、テュービンゲンにさえ行かなかった。毎日ストイックに図書館通いをした。当時の私の研究方法も一因だったが、とにかく石頭だったらしい。

それがどうしたことなのか、四十を過ぎるころから、興味を持つようになった。一度やると、もう病みつきで、様々な詩人を研究していたので、訪れたい地が次々と頭に浮かんで来て、困るほどだった。

といっても、トラークルについては、ザルツブルクとインスブルックにしか行ったことがないので、格別珍しい体験談もない。ザルツブルクを初めて訪れたのは留学期間中だった。まだ二十代で、卒論にトラークルをやったにもかかわらず、関係するものをザルツブルクで何一つ見ようとしなかった。それから十数年後、日本からわざわざ「文学旅行」に出かけて、初めて見物することになった。トラークル研究所・記念館も訪れた。トラークル協会設立間もない頃で、協会とのコンタクトを作るためだった。責任者のヴァイクセルバウム氏に会った。市内も見て回ったが、かなりの数の、詩句を刻んだ記念銘板や、トラークルの名の付いた橋や噴水など、聞いたことのない新しい発見があった。比較的最近、町での詩人の受容について、状況に変化があったのかもしれない。

インスブルックに行くついでに、トラークルの墓を見たいと思って調べてみた。ミューラウという村にあるという話だった。詳細地図を見ると、確かにインスブルックから数十キロ離れた田舎に、そういう村がある。交通不便な場所に見える。これは大変そうだとため息が出た。ところが、さらに調べると、実はインスブルックのすぐ近くのミューラウというところだとわかった。市中心部から直通バスで簡単に行ける。ほとんど市内とっていい。取り違えていたら、貴重な一日を棒に振るところだった。詩人ゆかりの地というのは、観光名所と違って情報に乏しい。せっかく出かけても、何も見つからず、空振りに終わることも珍しくない。

祭壇裏に掛けられた赤いリボンの豎琴を歌ったヘルティエの詩がある。この豎琴が今でもヘルティエの生地教会の祭壇裏に残っているという記述を、Oberhauser: Literarischer Fuehrer durch die Bundesrepublik Deutschland という、当時唯一の案内書で発見した。しかし

実にそっけなく一言書かれているだけだ。二百年以上前の話だし、本当に残されているのか。限られた旅行日数の貴重な一日を、こんな当てにならない「宝探し」に費やしているのか。しかし、当時ヘルティエを研究していたので、どうしてもこれが見たくなった。生地は田舎で、交通不便なところだ。こんなところまで出かけた日本人はこれまでにないだろう。迷った挙げ句、行ってみることにした。結果は Oberhauser の記述通りだった。今ならばインターネットで調べもつくだろうが、当時は Oberhauser が唯一の頼りだった。しかしこの本は、刊行後 23 年が経過して、必ずしも信頼できなかった。記載を頼りに行ってみると、何もなかったことしばしばだったから。

こうした旅行が文学研究の役に立ったかといえば、そうではない。大学改革の嵐が近づく時期と重なり、見聞を研究に生かすことがほとんどないまま、私の文学研究は終了した。では旅行は無駄だったのかといえば、必ずしもそうとは言えないかもしれない。研究に役立つ機会は来なかったが、すでに数多くの詩人を研究していた私は、旅行によって知識が再編され、生まれ変わる楽しみを味わうことができた。今後の研究に役立てようとする緊張と不安の中では、決して味わえない自由と楽しさがあったと思う。

トラークル協会のこと

伊藤 卓立

記念すべき『トラークル協会会報』第一号（1995 年度）の「活動報告」に、「5 月 13 日トラークル協会設立準備会が東京の池袋で開催される」、とある。三枝絃一氏から当協会設立の趣意書を受け取った私は気軽な気持ちで参加した。出席者は五名であったが、会の運営に参加可能な東京近郊に住んでいることを理由に、高橋喜郎氏と共に私は幹事を努めることになった。もちろん、会長は三枝氏以外に考えられなかった。その後は、慎重な三枝氏を中心に、まじめな高橋氏、参加するだけの私とで幹事会を開催してきた。しかし、同号の「編集後記」で三枝氏は、「曲がりなりにも会報をお届けすることができましたが、内容、体裁とも貧弱であることはどなたが見ても明らかです。しかし今のところこれが精一杯に近いというのが正直のところですよ」、と書いているが、様々な面で「貧弱」であったこの協会をこれまで牽引してきた会長のご苦勞には、私などの想像を遙かに超えるものがあつたであろう。同号の「編集後記」に会長の苦勞を予言するような一文がある。「ある独文学者の会でのことですが、ある方（勿論会員以外の人）が本会も設立を御存知で、『そういう会は結構なものであるが、長続きするのはすくない』と言われました。もっともなことでもあります。」しかし、トラークル協会を「存続させる」という会長の決心は揺るぎなく、その決意の成果は、8 冊の『会報』（第 1～8 号）と、『会報』の後を引き継ぎ、研究会誌に格上げされた 10 冊の『トラークル研究』（第 1～10 号）として、具体化されている。そして、トラークル没後百周年に当たる今年「トラークル協会」は設立二十周年を

迎え、「記念号」を発行することができ、先ずは当初の目的は達成された。

ところでトラークル協会は、過去 20 年のあいだ研究発表会を毎年必ず開催してきた。日本独文学会の開催に合わせて年に二回、春は東京で、秋は地方で開催するのが原則であったが、近年では様々な要因から地方での開催が難しくなりつつある、しかし、本年度は、独文学会の秋期研究発表会に合わせて、久しぶりに京都で開催した。京都はトラークル協会にとって思い出の地である。『会報』第二号の「1996 年度活動報告」には次の一文がある。「10 月 19 日午前 9 時 30 分より 12 時迄秋季総会及び研究発表会が京都の京大会館 219 号室で開催される。・・・その夜、先斗町の『上品』において懇親会が開催されました。」トラークル協会が設立されて 2 年目の秋の開催地が京都だったのだ。先斗町の「上品」で開かれた懇親会は 20 年の時を超えて今でも鮮明に覚えている。紅葉の京都、初めて体験する「一見さんお断り」の料亭、夜の光に和服姿の女性がちらほらと仄かに浮かぶ先斗町、鴨川の潺か、琴の音か、なにやら響く先斗町。ここで脳裏にふと浮かぶのはトラークルの詩 „Die schöne Stadt“ であろうか。「トラークル協会」に捧げると共に、会長の苦勞を勞って、口ずさんでも許されよう : „Helle Instrumente singen. / Durch der Gärtern Blätterrahmen / Schwirrt das Lachen schöner Damen. / Leise junge Mütter singen.“

今後とも心すべき問題点

植和田 光晴

『トラークル協会会報』1-8 号、『トラークル研究』1-10 号を読み返してみました。編集委員会、幹事会のご苦勞が改めて強く思われました。その中で今後とも心すべき問題点を提起された『会報』第 6 号の編集後記「啓蒙的な紹介書の刊行の必要性」を説いた記事と、おそらくそれと重大なかかわりを持っている『研究』第 1、2 号、ヴァイクセルバウム氏著『Georg Trakl』の翻訳出版への動きと、その断念の報告記事はもう一度改めて問い直す価値はありはしないか考えさせられました。

これからの研究の方向

三枝 絃一

トラークル没後 100 年を閲して、二つの HKA の刊行も相まって、その研究が進展している。しかしそれが順調に行われているかといえ、疑問が残る。最近の研究成果を見ても瑣末主義に陥っているものも多く、行き詰っている感を禁じ得ない。もともと研究の進展に障害となっている問題が特にトラークルにはある。

一つの問題は、言うまでもなくトラークルの詩の難解さにあると言える。しかし個々の詩に当たってみると、必ずしも全ての詩が難解とは限らない。難度がそれぞれ異なる。

「Helian」のように極めて難解な詩から「Verfall」のような平易な詩もある。最後期の詩でも「Grodek」のように比較的分かりやすい詩と様々である。と言ってもかなり多くの詩は難解である。これらは、論理的、継起的に展開していかない。詩想で押してゆくヘルダーリンの詩のような難解さではなく、現代詩の多くがそうであるように非継起的なイメージの連鎖であり、通常の論理では統一的な解釈が難しい。

二つ目の問題は、二次資料、例えばトラークル自身の、自らの詩についての言及は皆無に近く、また他の詩人の詩についての言表、更には詩論等が皆無であることである。したがって詩の解釈の裏付けになる二次資料を欠くために研究が難しい。そのためどうしても研究が主観的な印象批評に終わるか、あるいはトラークルの詩そのものが、判断基準となり、論が得てして堂々巡りに陥りがちになり、いささか発展性と生産性を欠くことになる。

しかしトラークルの論理的、継起的に展開していかない難解な詩の多くは、単なる非継起的なイメージの複合体ではない。それは一種の気分（Stimmung）によってほぼ支配されている。その「気分」を踏まえて、これとの関連のなかでイメージ、音韻、内容を統体的に捉えていけば、より良い解釈への道筋が見えてくる可能性がある。

次に解釈の裏付けになる二次資料を欠くというハンデキャップの克服に関しては、困難なことであるが、研究者それぞれが裡に確固たる客観的な基準を築くことである。そのために必要なことは、先ず地道ではあるが、トラークルの詩に限らず、今までの先人達の研究成果を検証し、二つのHKA、なかならずくインスブルック版を駆使し、また、これがもっともなされていないのであるが、他の詩人の詩との対照・比較をする他はない。その場合に重要なことは、研究の原点に、その都度立ち還ること、すなわちトラークルの詩の魅力は奈辺にあるのかを常に念頭において考察することである。敷衍すれば、その魅力の解剖が、その詩の解明に繋がる糸口になりうると言えるだろう。

トラークルの詩と出会って

高橋 喜郎

私が、初めて、トラークルという名の詩人を知ったのは、大学2年の時だった。確か、4人の先生方がリレー式に講義をする「ドイツの文学」という授業だったと記憶している。宮原朗先生は、ドイツ語の詩の講義をしてくださった。先生が最終回に取り上げたのは、トラークルで『滅び』《Verfall》と『受難』《Passion》だったと記憶している。私は、大変感銘を受け、同学社へ赴き、瀧田先生を中心になって編訳なさった『対訳トラークル詩集』を人手し、ノートを取りながら、独学で学び始めた。

私は、伝記的な要素に関心が強かったので、トラークルの幼時 (Kindheit) に関する卒業論文を書いた。その論文では、トラークルの「幼時」が、プリズムを通して、様々に分光してゆくのを、出采るだけ克明に辿った。

私は、16歳と23歳の時、重い鬱病を患った。そして、20歳代後半は、鬱病と様々な強迫神経症に悩み続けた。そのため、私は、カフカやハインリッヒ・フォン・クライストの作品をのめり込むようによみ、トラークルとは離れてしまった。私は、30歳の時、最も深刻な精神の危機に見舞われたが、なんとか病院に入院することなく、その危機を乗り越えることが出来た。30歳になって、ようやく、私の前に道が広がっているのを、感じる事が出来るようになった。私は、もしかしたら、50歳くらいまで生きられるかも知れないと思っていた。

私か短歌の勉強を独学で始めたのは、その頃だった。それに続いてフランス語の勉強も独学で始めた。30過ぎて、新しい外国語を始めるというのは、効率的でない。16歳の時、私は、ボードレルを翻訳で読み、いつか原文で読みたいと思っていた。何とかそれは、果たせだが、会話は、旅行会話程度しか出来ない。そして、短い手紙すら、正しく書ける自信はない。

20年程前、埼玉大学の同窓会の後、三枝さんが、トラークル協会を設立するお話を聞き、入会のお誘いを受けた。お断わりする理由は、何も無かったので、私は、トラークル協会に入会することとなり、今に至っている。私は、根が怠け者なので、することがなければ、寝転がって本でも読んで過ごすだろう。恐らく、トラークルの研究も全くしなかったであろう。トラークル協会は、20人程度の小さな結社なので、年に1度は、発表の順番が回って来る。それで、私は、ほんの少し勤勉になり、トラークルの全詩集を読み返す。発表のための原稿は、フロッピーに落とす。それが、すでに1冊の本にするくらい溜まっている。それは、トラークル協会のお陰と言っても良い。私の当面の課題は、とりあえず、色彩の問題を片づけることで、まだ扱っていない色もかなり残っているので、後数年はかかるだろうが、それを片付け、1冊の本に纏められれば、と思っている。現在は、外国文学受難の時代で、翻訳文学は、殆ど読まれない。ましてや、100年前に亡くなったオーストリアの詩人についての研究書を出してくれる出版社なぞ無いだろう。しかし、今は、以前と比較して、本の形にするのに、金も時間もかからない。原稿が、揃ったところで、本にする方法を考えれば良い。多くの人に読んでもらうのが目的ではないのだから、発行部数は、30部で、十分だろう。こういう想像は、何時でも楽しい。今は、書物にとって冬の時代だが、明けない夜がないように、おわらない冬も無い。

オーストリアのトラークル

保坂 直之

文献資料のコピーの作業に人生のどれくらいの時間を使ったのかな、と思うことがある。書籍をひっくり返しながらかピー機のフタを押さえる素早さには、我ながら職人になって長いな、としみじみ思う。先日、ある大学の図書館で資料の利用を断られたことがあるが、長い職人歴に照らしても著作権保護についてかくも厳しく言われるようになったのはそれほど昔からではないように思う。『ブレンナー』復刻版は日本の大学図書館でしっかりと守られている。誰のために何を守っているのかを誰も考えることなく、大学図書館の地下書庫で人の手に触れないように守られ続けるのだろう。変な研究者が触って爆発でもしたら大変なのだと思う。

その『ブレンナー』の亀の子文字がネットワーク経由で見られるようになっていたことを知った時は、今まで幾度もしたことではあるがオーストリアの方角に向かって手を合わせた。コーパスの勉強会などに出ると「ありがたいことに奇抜な人がいて」という言葉を何度も耳にするのだが、まさしく西方の奇抜な人たちの好意にいつも助けられているのである。

歳をとるごとに凶々しい性格になっているようで、インスブルック近郊 Mühlau まで Rauch-Villa の内部を見せてください、と今の持ち主の Wieser さんに頼みに行ったのは4年ほど前のことだ。Wieser さんの連絡先もブレンナー研究所の奇抜な方に教わった。「ここがトラークルが居候していた部屋だよ」と見せられたのは大学生の娘さんの部屋だった。

「いいんですか？ 年ごろの娘さんなのに了解なしに中を見て」と躊躇ったが、「われわれヨーロッパ人には部屋を見られて恥ずかしい、という感覚はない。大丈夫だ」と背中を押されながら内部の写真を撮ってきた。広い部屋だったが若い女子学生の持ち物や衣類が散らばるばかりでトラークルの気配は当然ながら全くない。不在の娘さんは大学でトラークルと同じ薬学を学んで、Wieser さんの奥さんが経営する薬局（3店舗くらいあるらしい）を継ぐのだという。その奥さんが Rauch 家、つまり Mühlau で財をなした事業家の子孫で、フィッカーは Rauch 家からこの屋敷を買い、歳をとって広すぎるようになった Villa を再び Rauch 家に売却して今日に至る、ということであった。Wieser 氏はウィーンでジャーナリストだったが、今は定職にはつかずに奥さんや家を支えている存在。つまりトラークルの実家も本来そうであったような階級として上層の欧州人たちなのである。Apotheker という言葉にはコンテキストによっては上層の人たちが自らの暮らし向きを守るために受け継ぐ権利、のような意味合いが加わりうるのを知った。ギムナジウムをやめたトラークルに薬学を学ばせた彼の父親はよく心得ていた、ということかもしれない。

遠い東洋でトラークルを読むことにくじけそうになるが、オーストリアに行けば手助けしてくれる人、提供される資料が尽きない。国民が幸せに感じる度合いが世界の二番目に高い国、と聞いたことがある。トラークルは100年後に自分の仕事がこのように彼の国でとても大切にされていることを全く想像できなかったのだろう、と思うと胸が痛む。

トラークル協会沿革

1995年

- 5月13日 トラークル協会設立準備会が東京の池袋で開催される。
- 9月20日 12時より北海道大学において、第1回総会及び研究発表会が開催される。
研究発表会 高橋喜郎：「Verfall」の周辺（三枝絃一代読）

1996年

- 3月 トラークル協会会報第1号発行
- 5月10日 14時より春季総会及び研究発表会が明治大学和泉校舎にて開催される。
研究発表会 三枝絃一：G. トラークルの詩における Reihungsstil (Zellenstil) について
中村朝子：報告—トラークルの詩における「都市」の形象とザルツブルク
- 10月19日 10時より京大会館において秋季総会及び研究発表会が開催される。
研究発表会 石橋道大：トラークルと印象派絵画—“Die schöne Stadt”と „In einem verlassenen Zimmer” を中心に
高橋喜郎：Über Trakls Brief 106

1997年

- 3月 トラークル協会会報第2号発行
- 6月7日 10時より緑が丘文化会館において春季総会及び研究発表会が開催される。
研究発表会 石橋道大：トラークルの跡を訪ねて
植和田光晴：リルケからみたトラークル

1998年

- 3月 トラークル協会会報第3号発行
- 6月6日 10時より調布市文化会館にて春季総会及び研究発表会が開催される。
研究発表会 Mateo Neri : Die universelle Form. In: Das abendländische Lied (合評)
伊藤卓立：トラークルにおける限界の体験—リルケと比較して
- 10月10日 10時より甲南大学において秋季総会及び研究発表会が開催される。
研究発表会 伊藤卓立「トラークルの限界体験—リルケと比較して」

1999年

3月 トラークル協会会報第4号発行

6月22日 10時より上智大学において春季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 三枝絃一：トラークルの評価と受容—ドイツ語圏の現代詩人の場合
高橋喜郎：『夢の中のゼバスチャン』試論I

2000年

3月 トラークル協会会報第5号発行

6月10日 10時より調布文化会館において春季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 三枝絃一：モンタージュ手法とトラークルの詩
高橋喜郎：『夢の中のゼバスチャン』試論II

10月7日 10時より名古屋工業大学において秋季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 高橋喜郎：『夢の中のゼバスチャン』試論III
石橋道大：トラークルの初期の散文『Verlassenheit』のテキストに基づく
カリグラフィー（石橋製作の作品の提示と解説）

2001年

3月 トラークル協会会報第6号発行

6月9日 10時より調布文化会館において春季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 植和田光晴：書簡から読み取る「体験」の変容について

10月20日 10時より松本ツーリストホテルにて秋季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 三枝絃一：トラークルのヘルダーリン受容に関する若干の考察
伊藤卓立：トラークルの詩作品に於ける形容詞の中性名詞化について

2002年

3月 トラークル協会会報第7号発行

6月1日 10時より草加文化会館にて春季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 両角正司：ホーフマンスタールの色彩と Ort についての試論—トラークルの対比のために—

高橋喜郎：ヴァイクセルバオムの『Georg Trakl』について

9月28日 10時より新潟会館にて秋季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 高橋喜郎：シンポジウムの資料についての論考
高橋喜郎：『Passion』の暗号

三枝絃一：トラークルの文学とデカダンス試論

2003年

3月 トラークル協会会報第8号発行

5月31日 10時より南大塚社会教育会館にて春季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 石橋道大、三枝絃一、伊藤卓立、高橋喜郎、両角正司：トラークルの詩における blau

10月18日 10時より仙台ビジネスホテルにて秋季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 三枝絃一：ハイデッガーの『Die Sprache im Gedicht Eine Erörterung von Georg Trakls Gedicht』における詩『Sommerneige』の解釈を巡って
伊藤卓立：トラークルとユージェントシュティール

2004年

6月5日 10時より北沢タウンホールにて春季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 シンポジウム「トラークルの詩における blau」の補足と総括
伊藤卓立：トラークルの青とピカソの青の時代の比較

10月 トラークル研究第1号発行

掲載論文 伊藤卓立：トラークルとユージェントティール

2005年

5月3日 10時より雑司が谷社会教育会館にて春季総会が開催される。

研究発表会 高橋喜郎：『Passion』について
三枝絃一：トラークルの詩における所属性の非呈示（試論）

10月 トラークル研究第2号発行

掲載論文 三枝絃一：トラークルの詩における所属性の非呈示とその意味及び効果

2006年

6月3日 10時より雑司が谷社会教育会館にて春季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 伊藤卓立：『Psalm』の Heidekrug について
高橋喜郎：トラークルのソネットについて

10月 トラークル研究第3号発行

掲載論文 伊藤卓立：トラークルの詩「プザルム」（第2稿）の”Heidekrug“について

2007年

6月9日 10時より北沢タウンホールにて春季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 保坂直之：トラークルとヘルダーリン—比喩の描法での比較
三枝絃一：夜の詩人—トラークル（試論）

10月7日 10時より大阪市のホテル・アウィーナにて秋季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 植和田光晴：「Kaspar Hauser Lied」再論
高橋 喜郎：書評『Androgynie und Inzest in der Literatur um 1900』

10月 トラークル研究第4号発行

掲載論文 三枝絃一：「夜の詩人」トラークル

2008年

6月14日 10時より豊島区勤労福祉会館にて春季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 高橋喜郎：ボードレールの『悪の華』における青とトラークルの青
三枝絃一：ハイムとトラークル—詩におけるblauの比較

10月12日 10時より岡山市勤労福祉センターにて秋季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 植和田光晴：花の色—芭蕉・蕪村とリルケ>トラークル
伊藤 卓立：トラークルと東山魁夷—青について—

10月 トラークル研究第5号発行

掲載論文 植和田光晴：『カスパー・ハウザー・リート』の考察
—あるいは表題の詩学—
保坂 直之：トラークルのザルツブルク・インスブルック<旅行記>

2009年

5月30日 10時より南大塚地域文化創造館にて春季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 保坂直之：トラークルの連作構造—共通語を通してみた「夢の中のセバステイアン」

高橋喜郎：トラークルの詩におけるゲオルゲ訳の『悪の華』

10月17日 10時より名古屋市のホテルいろはにて秋季総会及び研究発表会が開催

れる。

研究発表会 伊藤 卓立：トラークルと能「羽衣」一息の形象―

植和田光晴：花の色―芭蕉・蕪村とリルケ・トラークル―（続）

10月 トラークル研究第6号発行

掲載論文 三枝絃一：ゲオルク・ハイムの詩における blau―トラークルとの比較において

2010年

5月29日 10時より緑が丘文化会館にて春季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 三枝絃一：トラークルの詩における das lyrische Ich

高橋喜郎：トラークルの詩の多義性について

10月9日 10時より船橋市中央公民館にて秋季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 伊藤卓立：トラークルとリルケの黒について（1）―リルケの黒について

三枝絃一：インスブルック版の編集方針について

10月 トラークル研究第7号発行

掲載論文 伊藤卓立：トラークルの blau について―1912年夏から1913年春まで―

2011年

10月15日 10時より金沢市文化ホールにて秋季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 伊藤卓立：トラークルの詩作品における色彩語「黒」（schwarz）の時代区分とその一考察

高橋喜郎：トラークルの詩における silbern について

―ボードレールの『悪の華』におけるその用法の含めて

10月 トラークル研究第8号発行

掲載論文 三枝絃一：トラークルの詩における das lyrische Ich の発展的変容

2012年

5月19日 10時より雑司ヶ谷地域文化創造館にて春季総会及び研究発表会が開催される

研究発表会 保坂直之：ルートヴィヒ・フォン・フィッカーの Rauch Villa における
トラークル

三枝絃一：トラークルの詩最終三部作

10月13日 10時より府中市文化センターにて春季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 高橋喜郎：トラークルの詩における **rosig** の用法について
三枝紘一：トラークルの詩における植物についての若干の考察

10月 トラークル研究第9号発行

掲載論文 三枝紘一：トラークルの詩の最終三部作の表現

2013年

5月25日 10時より調布市文化会館たづくりにて春季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 伊藤 卓立：トラークルの詩世界における **Tod** について
保坂 直之：1914年3月のベルリンとトラークル

10月 トラークル研究第10号発行

掲載論文 伊藤 卓立：トラークルの用語 „**Tod**“について —解釈と翻訳—

2014年

5月24日 10時より流山市生涯学習センターにて春季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 高橋 喜郎：トラークルの詩における **weiß** について
三枝 紘一：トラークルの **Poetik** 序説 —その稿体の語の変更から見たメチエ

11月11日 10時より京都メルサにて秋季総会及び研究発表会が開催される。

研究発表会 伊藤卓立：トラークルの詩「途上にて」**Unterwegs** の „**Laß, wenn** …“ について

保坂直之：テキスト検索で読む『夢の中のセバスチャン』の連作形式
厚凜において記念パーティーが開催される。

10月 トラークル研究（トラークル没後100年及びトラークル協会創設20周年
記念特集号）発行

掲載論文 伊藤 卓立：トラークルの詩「途上にて」(**Unterwegs**) „**Laß, wenn**“
について —翻訳・誤解・誤訳—

三枝 紘一：トラークルの **Poetik** 序説 —その稿体の語の変更から見たメチエ

高橋 喜郎：トラークルの詩における **silbern** の用法について

保坂 直之：連作構造から見た『カスパー・ハウザーの歌』

2013年度活動報告

5月25日(土)2013年度春季総会・研究発表会が調布市文化会館たづくりにおいて開催された。

総会

- (1) 『トラークル研究』第十号の発行は、10月1日を目途に発行する。
- (2) 2013年度秋季総会及び研究発表会
諸般の事情によって中止
- (3) トラークル没後100年及び本会の創設20周年記念事業
 - 1) 特集号の発行(論文の他、感想、随想、その他)
 - 2) 記念パーティーの開催
 - 3) トラークル記念館、ザルツブルク市の行事への参画
- (4) 2014年度春季総会・研究発表会
期日:5月25日(土) 会場:日本独文学会会場(麗澤大学)に近い公共施設を予定
- (5) 2012年度決算
本会の2012年度決算が承認された。

2012年度決算報告

トラークル協会2012年度決算報告			
自2012年4月1日 至2013年3月31日			
収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	71316	会場費(雑司ヶ谷地域文化創造館)	2400
本年度会費	32000	切手代	9570
寄付金	20000	「トラークル研究」第九号印刷代(振込手数料を含む)	17745
		領収証用紙	168
		会場費(府中中央文化センター)	800
		会場費(調布市文化会館たづくり)	1100
		本年度支出合計	31783
		次年度へ繰越	91533
		(内、本年度剰余金)	20217)
合計	123316	合計	123316

研究発表会

伊藤卓立 : トラークルの詩的世界における Tod ついて

保坂直之 : 1914年3月のベルリンとトラークル

2. 10月19日(土) 2013年度第1回幹事会が開催された。
3. 3月12日(水) 2013年度第2回幹事会が開催された。

お知らせ

1. 2015年度春季研究発表会に発表希望の方は、2月末日までに論題をお知らせください。
2. 「トラークル研究」第12号に論文等を発表希望の方は、2月末日までにお知らせください。
3. 会費未納の方は、御納入のほどよろしくお願ひします。

編集後記

トラークル没後百年及び当会創設20周年記念特集号をお送りします。

発行が大幅に遅れて申し訳ございませんでした。こころよりお詫び申し上げます。文章が多く編集に時間がかかったのと編集者のパソコン処理の拙さのためです。しかし発行の運びになったのは、後者の件に関して伊藤卓立氏の懇切なアドバイスと御協力の賜物でした。ここに氏に感謝申し上げます。

本号は、ささやかなトラークル協会にとって、この20年のささやかな一つの里程碑になるのではないかと秘かに考えています。今後は更なる発展と論文の充実化を図るとともに、活動の多様化も考慮しなければならないと思います。例えば「随想」において植和田光晴氏が指摘されているように、トラークル文学を一般に普及させるために啓蒙的なトラークル紹介の書の出版と同時にトラークルの伝記(Otto Basilの『Trakl』、なかんずく Hans Weichselbaumの『Georg Trakl』)の翻訳の刊行も考えに入れる必要があるでしょう。また会員それぞれのトラークル関連の蔵書のリストアップとその公開も考慮されてしかるべきと思われます。更にはドイツ語圏への発信も視野に入れるべきでしょう。例えば、とりあえずザルツブルクのトラークル研究施設・記念館への「トラークル研究」の寄贈(所載の論文のタイトルと要約を付して)が考えられます。(さ)

トラークル協会会員名簿

2014年10月現在

氏名	住所	電話
石橋 道大	会計監査	
伊藤 卓立	幹事、編集委員（査読委員）	
植和田 光晴	会計監査	
梅崎 潜		
鍛冶 哲郎		
岸田 孝一		
児玉 昭人		
三枝 紘一		
杉田 芳樹		
高橋 修		
高橋 喜郎		
筑和 正格		
中村 朝子		
保坂 直之		
三木 正之		

氏 名	住 所	電 話
南谷 和伸		
宮原 朗		
両角 正司		

トラークル協会会則

1995年 9月 20日制定
 2003年 10月 18日改正
 2004年 10月 1日改正
 2005年 5月 3日改正

第一条（名称）本会はトラークル協会と称する。

第二条（目的）本会はトラークル文学の普及、及びその研究の促進を図ることを目的とする。

第三条（事業）本会は年2回総会・研究発表会を開催する。また年一回研究誌を発行する。その他本会にかなう事業をする。

第四条（会員）本会の会員はトラークル文学及びその時代に関心を有する者とする。

第五条（役員）本会は会長（あるいは代表幹事）をおくことができる。

また若干名の幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）をおく。

会長（あるいは代表幹事）、幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）は総会において選出する。

会長（あるいは代表幹事）、幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）の任期は2年とし、再任を妨げない。

第六条（顧問）本会には顧問をおくことができる。顧問の委嘱は総会で決定する。

第七条（会費）本会の経費は会費、その他の収入によって支弁し、会費は年額2000円とする。

第八条（決算）本会は毎年度決算をし、総会に報告する。

第九条（改正）本会則の改正は総会の出席者の3分の2以上の賛成を必要とする。

（備考）本協会の事務所在地を当分のあいだ、三枝統一気付とする。